

## 『源氏物語』のヤウニについて

近 藤 要 司

「やう（よう）」という語は、中古から盛んに用いられて、現代語の「すこし大きいようだ」のヨウダや、「あれじゃあ、手の出しようがない」の「ヨウガナイ」などの表現につながる息の長い形式である。

しかし、その変遷については、山口（二〇〇三）が、大まかな全体像を描いている他は、あまり研究が進んでいない。

そこで、近藤（二〇〇六）において、『源氏物語』のヤウナリとヤウアリについて調査報告し、続いて近藤（二〇〇七）で『今昔物語集』のヤウナリとヤウアリについて調査した。

近藤（二〇〇六）では、『源氏物語』に見られるヤウナリは、いまだ助動詞とは呼べないもので、形式名詞ヤウと断定の助動詞ナリの連語であり、ほとんどが上の用言をもととして形容動詞を作るといった性格が強いことを確認した。ただし、「動詞＋ヤウナリ」の中には、

・大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏におぼし嘆くことさまざまなり。（明石）（太后までなんとなくお弱りになるご様子なので、帝はあれこれとお嘆きあそばす。）

のような動詞文で、事態の生起をばかして表現するもの（注一）があり、これなどは一面現代語のヨウダに近い性

格を持つものであった。

本稿では、この近藤（二〇〇六）に引き継ぎ、『源氏物語』のヤウニの形式について調査したものである。

ヤウニは、現代語でも活発に用いられる形式であるが、現代語のヨウニに見られる「祭が見られるように日程を調整した」「蓋が外れないようにねじで留めた」のようないわゆる「目的」の用法は中世以後に発達した用法で中古には見られないとされている。しかしながら、『源氏物語』の用例の中にも、目的に近い性質のものも見られるのである。

以下、(二)で、『源氏物語』のヤウニの全体像を概観し、(三)で、目的に近いヤウニについて検討し、現代語の目的用法とどこが異質なのか、現代語と同様の目的の用法はなぜ中古には存在しないのかについて考察する。

用例の検索抽出には角川書店の『源氏物語』CD-ROMを利用し、小学館新全集を中心とした注釈書を参照した。

## 二 「源氏物語」のヤウニの概観

### 二の一 分類基準

『源氏物語』においては、形式名詞「やう」は、八五五例存在する。この中で、「やうにて」の形や、「やうにぞある」のようなもの、および「さやう、かやう、いかやう」を除いたヤウニの例は、三一九例ある。

前節に述べたように、『源氏物語』のヤウナリは、上の語句を形容動詞化する補助用言の性質が強かった。そこで本稿では、形容動詞の連用修飾のあり方に従ってヤウニを分類する。その場合、ヤウニの係り先の述語が形容詞（以下、形容動詞を含んで「形容詞」とすることがある）や存在のありである場合と、動詞の場合では、連用修飾のあり方が異なってくるので、まず係り先が形容詞述語の場合と、動詞述語の場合に分けることとする。そのよう

な分類で見ると、ヤウニの分布は以下の通りである。

ヤウニが形容詞述語を修飾する用例 四〇例

ヤウニが動詞述語を修飾する用例 二六六例

名詞文の用例は無かった。

・今しも来たる老いのやうに、などは笑まれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり。(朝顔)

のように文末が省略され、係り先の述語の種類が不明なものが一例あった。

形容詞・形容動詞が、係り先の形容詞述語を修飾する場合には、評価 なほ、御宿世とは言ひながら、思はずに幼くて(夕顔)、程度基準 いかすかにあはれるけはひを(総角)

並列 人がらのあはれに、情ありし御心を(桐壺)

の三用法が考えられるので、ヤウニについても三種に分類した。

動詞述語の場合には、

内容 命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。(桐壺)

評価 ことさらに人來まじき隠れが求めたるなり。(夕顔)

状態 すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。(梅枝)

結果 ほかたの世につけて、身のいたづらにはふれぬべかりしころほひなど(幻)

の四つの用法に分けて考えた。どちらもおおよその分類であるが、形容詞や形容動詞の連用修飾はこの範囲に収ま

表.1 係り先が形容詞述語の場合のヤウニの用法一覧

連用修飾のタイプ	比喩	臙化	例示	小計
並列	0	2	0	2
評価	18	2	0	20
基準	0	0	18	18
形容詞述語合計	18	4	18	40

表.2 係り先が動詞述語の場合のヤウニの用法一覧

連用修飾のタイプ	比喩	臙化	様子	例示	小計
内容	42	54	26	4	126
評価	0	15	0	0	15
状態修飾	50	0	0	46	94
結果修飾	11	10	7	1	29
動詞述語合計	101	126	33	5	265

ると考える。(注二)

一方、「ヤウニ」自体は、「外見、事情」といった意味を持つ形式名詞に、名詞文、形容詞文、動詞文が連体修飾を行っているのと同じ。上接する部分が動詞文や名詞文の場合には、ヤウニの表現効果は「比喩」あるいは「例示」といった意味で下を修飾する形容動詞となる。上が形容詞の場合には、元の形容詞と較べて、「外見上あるいは表現上その形容詞で形容できる」というように、一歩引いて表現を和らげた「臙化」の意味の加わった形容動詞になる。

以下は、まず、形容詞述語にかかる場合、動詞述語にかかる場合に分け、さらに、形容詞の場合には、三類に、動詞の場合には、四類に分けてヤウニの用法を概観する。

## 二の二 形容詞述語にかかる場合

「ヤウニ」が形容詞述語にかかる用例の内、並列の用法が二例、評価の用法が二〇例、程度基準の用法が一八例あった。以下例を挙げる。

### 二の二の一 並列の用法

①しか思ひたまふることはべりながら、もの騒がしきやうに、静かなる本意もなきやうなるありさまに、明け暮らしはべりつつ（鈴虫）

②この君も、まづさるべきことにつけつつ、をかしきやうにも、まめやかなるさまにも心寄せつかうまつりたまふこと、三年ばかりになりぬ。（橘姫）

『源氏物語』では、ヤウニの並列の用法はこの二例のみである。①も②も臙化の表現効果が出ている。並列の場合には、特別な事情がない場合には、「あへなくあはつけきやうにや聞きおとしたまひけむ」（若菜下）のように、

前の形容詞を通常の連用形で表現することが普通なので、用例が少ないのである。

## 二の二の二 評価の用法

名詞十ノ・ガヤウニが十例、動詞述語十ヤウニが十一例で、形容詞の例は無かった。

①腕などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変はらず、白ううつくしげになよなよとして（総角）

②萱草など澄みたる色を着て、いとささやかに、様体をかしく、いまめきたる容貌に、髪は五重の扇をひろげたるやうに、こちたき末つきなり。（手習）

これら用例でのヤウニの表現効果はすべて比喩である。①では「弱げなり」という状態について「影とでも言えそうだ」と評価しているのである。②は動詞述語の例である。比喩の表現効果が出るばあい多くは、この用例のよりにリ・タリが下接して、結果状態を示す形式になっている。

## 二の二の三 程度基準の用法

「名詞十ノ・ガヤウニ」が八例、「形容詞述語十ヤウニ」が一例、「動詞述語十ヤウニ」が九例あった。

①「さてかかる古ことのなかに、まろがやうに実法なる痴者のもの語りはありや。（蜚）

②かの人の御けしき、はた、同じやうになだらかなれば（梅枝）

③前なる御達にもなど言ひたはぶれて、うちとけたるは、いと見しやうに勾ひなく人わろげにて見えぬを（東屋）

それぞれ係り先の形容詞述語の示す内容の程度の目安をヤウニの上の語で示している。②の「同じヤウニ」は、

動詞文の場合には多用されている。また③の「見しヤウニ」も、「かつて見たその時の程度に比して」という意味合いで用いられている。この「見し」は評価の例であげた「五重の扇をひろげたるやうに」とは異なり、比喩ではない。同類の既実現の事態を例示しているのである。

## 二の三 動詞述語にかかる場合

「ヤウニ」が動詞述語にかかる場合は、形容詞に比して遙かに多く、二六五例ある。この内、発話や思考の内容を示す「内容の用法」が一二七例と最も多い。ついで動詞述語の表す動作変化の状態を示す「状態の用法」が九三例でこれに次ぐ。述語動詞の動作や結果が実現したあとの状態を示す「結果修飾の用法」は、三〇例あった。形容詞と同様の「評価の用法」は、一五例だった。

## 二の三 内容の用法

「名詞＋ノ・ガ＋ヤウニ」が三一例、「形容詞述語＋ヤウニ」が三七例、「アリ＋ヤウニ」が五例、「動詞述語＋ヤウニ」が五一例あった。

①紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎすぎにあまたかさなりたるけぢめはなやかに、草子のつまのやうに見えて、桜の織物の細長なるべし。(若菜上)

②「などか、返さひ申されける。ひがひがしきやうに、院にもきこしめさむを、おどろおどろしき病にもあらず、助けて参りたまへ」(若菜下)

③「ひがごとのあるやうに見えつれば、所たがへかとして」とのたまふ。(浮舟)

④この御法事の、忍びたるやうにおぼしたれど(蜻蛉)

それぞれ一例を挙げたが、これらにはみな「人にすぐれたるただ人と見えて(行幸)」「みづからをほけたり、ひ

がひがしとのたまひ恥ぢしむるは」(真木柱)のような引用の格助詞も用いることが出来る。それらと比較すれば、引用の用法としては、ヤウニの用例には、「概要」といったニュアンスが感じられる。

比喩の表現としては、助詞トについても「花と散る」のような用法がないでもないが、やはりヤウニの方が優勢であろう。

⑤われにもあらずあらぬ世によみがへりたるやうに、しばしはおぼえたまふ。(夕顔)

⑥ひき広げて、玉水のこぼるるやうにおぼさるるを(真木柱)

内容の用法が引用に近いということは、「ヤウニ」が独立した文相当の内容になりえるということになる。「動詞述語+ヤウニ」の中には、推測や伝聞として述べるという表現性を感じさせるものがある。

⑦やうやう生きいでたまふやうに聞きなしはべりて、今なむみな人心しづむれど、まだいとたのもしげなしや。(若菜下)

⑧このころきこしめせば、女房の御もとに、知らぬところの人通ふやうになむきこしめすことある、たいだいしきことなり(浮舟)

⑦は、夕霧が、紫の上が一時危篤状態に陥ったが持ち直したということを周囲に聞いて、これを、兵部卿の宮に伝聞として告げる部分で「だんだんと息をおふき返しになったとかうかがうことができまして」といった意味になる。⑧は、「素性の知れぬ男どもが通うとかお聞き遊ばすことがあって」という内容で他者(薫)が聞き知った内容を配下の内舎人が推測するという文脈である。これらは、単純に「様子・概要を言う」ものではなく、「確認できない事柄を推測して言う」表現になっている。このような表現は、ヤウナリにも存在し、仮に様子の用法と名付けたものにも見られた。その意味でこれも現代の推定のヨウダに接近している。(注三)

しかし、ヤウナリにせよ、ヤウニにせよ、このようなものは、少数にとどまっており、ヤウナリ・ヤウニが推定

を表すようになったとはいえない。

## 二の三 評価の用法（一五例）

ヤウニの係り先の動詞が表す事態についての評価を表す用法である。すべて以下のような形容詞述語＋ヤウニの形である。ヤウ自体は、上の形容詞述語の表現を和らげることに働いている。

- ① 古歌とても、をかしきやうに選りいで、題をも、よみ人をもあらはし（蓬生）
- ② 今宵はかるがるしきやうに、ふとかく参りたまへれば、いたう驚き待ちよろこびきこえたまふ。（鈴虫）

## 二の三 状態修飾の用法（九五例）

内容の用法に次いで多くの用例があった。「名詞十ノ・ガ＋ヤウニ」が五〇例、「形容詞述語＋ヤウニ」が一例、「アリ＋ヤウニ」が四例、「動詞述語＋ヤウニ」が四〇例である。

- ① かしこにはまして心細く、風の音をも、今はかへりて、若き子のやうにおちたまふれば、心苦しさにまかではべりなむ」と申したまへば（野分）

- ② 御しつらひなども変はらず、御衣掛の御装束など、例のやうにし懸けられたるに、女のが並ばぬこそさうざうしくはえなけれ。（葵）

右の例のように「名詞十ノ・ガ＋ヤウニ」では、①のような比喻の表現と②のような例示の表現になる。

- ③ 院にさぶらはるるが、いといった世の中を思ひ乱れ、なかぞらなるやうにただよふを、（竹河）
- ③ は形容詞の例、厳密には形容動詞であるが、これは比喻の表現になっている。

- ④ こまやかに、世の中のあるべきやうなどを、はらからやうの者のあらましやうに、教へ慰めきこえたまふ。



(宿木)

④は比喩の例だが、アリの他の例は「アリシ」であり、例示である。

⑤おのがどちあはれなることもうち語らひて、「殿のおぼしのたまはするやうに、若君を見たてまつりてこそは慰むべかれ (葵)

⑥髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。(若紫)

⑦例の風いで来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。(明石)

「動詞述語＋ヤウニ」は、名詞と同様に比喩と例示の表現である。

⑤は例示の用法であり、⑥⑦は、比喩の用法である。

## 二の三 結果修飾の用法 (二八例)

結果修飾のヤウニについては、現代語の目的の用法と似た点もあるため、挙例を増やし詳細に検討する。

結果修飾のヤウニのうちわけは、「名詞＋ノ・ガ＋ヤウニ」が二例、「形容詞述語＋ヤウニ」が八例、「アリ＋ヤウニ」が一例、「動詞述語＋ヤウニ」が一七例である。

「名詞＋ノ・ガ＋ヤウニ」の例

①「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」(末摘花)

②、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむこともいとど久しかるべきぞ (賢木)

①は「色どりそふ」の結果として「平中がヤウ」が生じるという意味になる。②も「成る」変化の結果が「僧のヤウ」である。ヤウによって比喩としての表現効果に加わっている。

## 「形容詞述語＋ヤウニ」

③「故宮おはせし時、おのれをば、面伏せなり、とおぼし捨てたりしかば、うとうとしきやうになりそめにしかど、年ごろもなにかは。(蓬生)」

④「この年ごろ、領ずる人もものしたまはず、あやしきやうになりてはべれば(松風)」

⑤「すぎずきしきやうになりぬるを」など(朝顔)

⑥ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ(少女)

⑦この世にはかひなきやうにないたてまつるも飽かず悲しければ(柏木)

⑧少しいとまなきやうにもなりたまひにたれど(浮舟)

⑨「いとほしう、父宮のいみじくかしづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさむこと」(蜻蛉)

⑩法師は、そのこととなくて御文聞こえうけたまはらむも便なれば、自然になむ愚かなるやうになりはべりぬる。(手習)

形容詞述語の場合は、形容詞連用形の直接的な修飾に比して、和らげた臚化の表現になっている。

名詞述語・形容詞述語を見て気付くことは、当然のことながら、結果修飾のヤウニをうける述語動詞は、主語あるいは目的語に変化をもたらず他動詞と自動詞である。代表的には「成る ②③④⑤⑧⑩」である。これらは、現代語の「餅が固まって石のようになる」のような「　ようになる」と同じ表現である。

他の「なす ⑦」「もてなす(見せかける、処置する) ⑥⑨」についても現代語の「　ようにする」と同じである。

これらは、「する、なる」が意味する変化の結果の状態について、比喩的にあるいは和らげた臚化の表現をして

いるのである。

ただし、①の例は、「色どり添ふ」という具体的な動きが生起して、その結果「平中がやう」という状態が出現するのであり、「なる、なす、もてなす」とはやや異質である。

# 「動詞述語＋ヤウニ」

動詞述語の場合も、多くは「なる、なす、もてなす」が係り先である。

①ただ消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ（総角）

次の「しなす、ものす、しつらふ」も同様に考えられる。

②丑寅の町に、御しつらひまうけたまひて、隠ろへたるやうにしなしたまへれど、（若菜上）

③女どち草しげう住みなしたまへりしを、みがきたるやうにしつらひなして（夕霧）

④庄の人召して、あるべからむやうにものしたまへ（宿木）

「動詞述語＋ヤウニ」の例では、「しヤウニ」が事態の生起を表す場合もあるが、ここでの例は、①②③は結果として生ずる状態に対する比喻であり、名詞や形容詞述語の場合と同様である。⑤は概言表現を伴う珍しい例だがこれも例示の例である。

ここまで検討したヤウニの例は、内容の項にあげた伝聞的な表現とも解釈できる例以外は、形容動詞の連用形の用法に収まるものであった。

しかしながら、「動詞述語＋ヤウニ」が結果修飾をするものには、現代語の目的のヨウニに接近した例もある。これについては、節をあらためて検討する。

### 三 目的のヤウニに近い用例について

「動詞述語＋ヤウニ」で、現代語の「～ようにする、ようになる」とは異質のものとしてまず以下のようなものがある。

① あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さ  
まなり。(野分)

② 髪の裾のにはかにおほとれたるやうに、しどけなくさへ削がれたるを、(手習)

① については、「愛敬はにほひ散る」という事態と、その結果生ずる「わが顔にも移り来る」という事態は別のものである。② についても「しどけなくさへ削がれたる」という事態と、「髪の裾のにはかにおほとれたる」という結果は別の事態である。したがってこの三にあげたものとは異質である。しかし、述語動詞が意志的な動きを意味するものではないので、現代語の目的とは異なっている。一方、次の③～⑥は、目的の用法にかなり近い。

③ 今参れるやうにうち声づくりて、簀子のかたに歩みいでたまへば(野分)

④ いと若びたる声の、ことにおもりかならぬを、人づてにはあらぬやうに聞こえなせば(末摘花)

⑤ しひて見知らぬやうにもてなして(紅葉賀)

⑥ さばかりのほどになりぬる人は、いとかくはおはせぬものを、と目とまれど、見ぬやうにまぎらはしてやみ  
たまひぬ。(若菜上)

③は、(紫)上の姿を盗み見していた夕霧が「今参上したかのように、咳払いをして」という意味であり、「今参上す」という事態と「うち声づくり」という事態とは別事態であり、「うち声づくり」は意志的な動作である。

また、この文全体の解釈としても、「夕霧が、今参上したと大臣(源氏)に受け取られることを目的として、咳払

いをした」ということであろう。このように見れば、現代語の目的の「～ように」にかなり接近した用例であることは確かである。

ただし、現代語の目的のヨウニについて前田(二〇〇六)は、

「よう(に)」節が、後節(主節)とは意味的にも時間的にも、同時発生的でない、別個の事態を表している場合には、単純な「様態」表現でなく、「目的」の表現に近づいていることがわかる。(四三頁)

としていて、現代語の典型的な目的の「ように」では、「ヤウニ」の事態と、係り先の動詞述語の示す事態が同時発生とはならないと述べている。③は、結果・原因の関係にはあるが、同時発生的であり、典型的な目的用法とは異なることになる。

④⑤⑥は、現代語の目的の用法にも目立つ「否定表現+ヤウニ」の形式を取っている。④では、(若女房が)「聞こえなす(事実ではないことを事実のように言う「いひなす」の謙譲語)動作の結果「人づてにはあらぬやう」という否定的状態が発生する。⑤では、(紫の上)の「まぎらはす」という動作が「(ふみの欠点を)見ぬやう」という結果状態が生ずる。そして⑥では、「もてなす」結果、「見知らぬやう」という結果状態が生ずるのである。

これらは、③と同様に係り先動詞述語が他をあざむく作為を表す動詞であり、事情は同じである。しかし、ヤウニの上が否定的事態であることは大きな違いである。

否定的事態とは、積極的に何かが実現したことを表現しない。結果として生ずる事態としては何も述べられていないとも言えるのである。だが、否定的事態には必ず未実現の肯定的事態が連想される。それは、④では「人づてなり」、⑤⑥では「見知る、知る」であろう。その未実現の「人づてなり」「見知る、見る」を連想し、回避すべき事態として否定するのは、話者の解釈である。

係り先の動詞の意味する事態が実現しても実は何も起こらないのであるが、そこにある事態を想定した上で、そ

の事態の実現が回避されたと解釈しているわけである。かつまた、この想定された回避すべき事態は、係り先の動詞の意味する事態とは全く別の事態だということになる。

目的の用法の萌芽は、このような「ある動作が成立し、結果として何も生じなかった。しかし、それはある事態の生起が回避されたとも解釈される。つまり、ある事態の回避を目的として、ある動作がなされた」という仕組みであったであろう。そのような表現が成立するためには、ヤウニの上が否定的事態でかつ、係り先動詞が「もてなす、いひなす」のような、ある下心をもって、他をあざむく作爲的な動作であることが前提だったのである。つまり、そのような作爲的な意図を前提として、結果として何も生じないところから、「ある事態生起の回避」という解釈が下されるのである。

二節に述べたように、内容の用法の一部に、伝聞的な表現となつて、話者の解釈を語るものが見られた以外は、ヤウニは単純に形容動詞連用形を形成しているといつてもよいものであった。この時期のヤウニ・ヤウナリは、推定を語るといふ性格に乏しいのであった。このことと、ここに挙げた目的用法の萌芽の例も結局は係り先の動詞の特殊な意味に支えられていたことは軌を一にすることである。中古のヤウナリヤウニには、推定の意味が未発達であったので、右のような条件が整わないかぎり、現代語の目的の意味は表現できなかったのである。

『源氏物語』以後の初期の目的のヤウニを見ても、「打ち消し+ヤウニ」が多い。管見にはいった用例を挙げてみると

⑦其ノ藥ヲ思ヒ廻スニ、只乳(ニウ)ヨリ外ノ藥无シ。然レバ、乳ヲ猶令服メ奉ラムト思フニ、前々ノ醫師皆被殺レバ極テ益无シ。然レドモ思ヒ煩テ乳ヲ非ヌ様(ヤウ)ニ合藥シ成シテ、「他ノ藥ゾ」ト云テ奉リツ。(『今昔物語集』巻第四 天皇國王服乳成成願擬殺書婆 語三十一)(注四)

⑧檢非違使ども河原に行て、よせばし、掘り立てて、身をはたらかさぬやうに、はりつけて、七十度のかうじ

をへければ(『宇治拾遺物語』二二 金峯山薄打事 卷二ノ四)(注五)

これらは、『源氏物語』の④⑤と異なって、係り先の他をあざむくような作為を持った動詞ではない。この点において、『源氏物語』の用例よりも、もう一步現代語の目的のヨウニに接近していると言える。(注六)

このように『源氏物語』以後の目的のヤウニの例から考えても、それが、ヤウニの結果用法でヤウニの上接部分が否定的事態になったものから生じたと考えられるのである。

先に述べたように、この回避すべき事態は、当該の事態(ヤウニの係り先の動詞述語の意味する事態)からは、直接生起するものではない。話者の解釈によって想定される事態である。この間接的にイメージされる事態が回避すべきものではなく、招来すべき事態にも広がった結果、現代語のような目的の用法が生まれたのであろう。

#### 四 まとめ

本稿では「かやうに、さやうに、いかやうに」以外の『源氏物語』のヤウニの全例について調査したものである。そこでみるかぎり、ヤウニは上の部分と一体となって形容動詞連用形を形成していることができた。

したがって、その用法は、形容詞や形容詞の連用修飾と同じく、

形容詞述語を修飾する場合には、評価、基準程度、並列の三用法

動詞述語を修飾する場合には、内容、評価、状態修飾、結果修飾の四用法

にまとめられる。また、上接部分に対するヤウの働きは、「比喩、例示、臚化、様子」の四つであり、ヤウナリの場合とはば一致する。

目的の用法はまだ登場していないが、「打ち消し表現+やうに」が「他をあざむく」意味の動詞を修飾するときには、「ある事態の回避を目的として、当該動作が行われた」という表現性が生じる。これは、目的用法の萌芽と

なるものである。

注

注一 前稿では「様子」用法と仮に呼んだ。

注二 この分類では、同じ「例のやうに」が形容詞文の場合には基準程度に分類され、動詞文では状態に分類されることになる。

・この御前をとくたちなむと思へば、例のやうにこまやかにあらでやうやうすべりいでぬ。(若菜下)

・「例のやうに聞こえむ」と、また御消息あるに、心あやまりして(総角)

注三 近藤(二〇〇六)参照。

注四 本文は新大系本による。「(王を治療する)その薬に思いを巡らすのだが、乳(乳製品)より他の薬はない。そこで、乳を服薬させ申し上げようと思うのだが、前の医師も(乳を服薬させ王の不興を買い)皆殺されているので全く無益なことだ。しかし、思案に窮して、乳をそうではないように他のものと調剤して、『別の薬である』と言って差し上げた。」という意味になる。

注五 本文は新大系による。「寄せ柱を立てて、体を動かさないようにはりつけて、七〇回の拷問を加えたので」という意味になる。

注六 これら以外に日本国語大辞典(新版)の目的の「ように」の項にあがっている一番古い例も「あつき比なれば、首の損ぜぬ様にはからひ」(平家一一・大臣殿被斬)が挙げられている。



## 参考文献

- 川端善明「副詞の条件―叙法の副詞組織から」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 一九八三年
- 仁田義雄「結果の副詞とその周辺」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 一九八三年
- 山口莞二(二〇〇三)『助動詞史を探る』和泉書院二〇〇三年九月
- 前田直子『ように』の意味・用法』笠間書院二〇〇六年十一月
- 近藤要司『源氏物語』のヤウナリとヤウアリ』『親和國文』二〇〇六年十二月
- 近藤要司『今昔物語集』のヤウナリとヤウアリ』『親和國文』二〇〇七年十二月